原敬の書(1)

その評価をめぐって（書翰の書を中心に）

玉澤友基

一、はじめに

日本初の本格的政党内閣の組閣を行い、「平民宰相」と呼ばれた原敬〔安政三年（一八五六）～大正十年（一九二一）〕の、政治家としての業績や生涯の伝記等については今日に至るまで極めて多くの論評や出版がなされている。原の「書」もそれらの巻頭等に時折紹介されている。しかし、その書の全貌は意外と知られていないし、後で詳述するように評価も定着していない。

先年、盛岡市の原敬記念館を訪れ、その書翰を閲覧する機会があった。政治家の書など俗物もいいところと決め込んでいたが、真蹟（注1）を見て、天馬空を駆けるような筆勢と躍動する筆致に息をのんだ。筆は書者と一体となりその性能の限りを尽くしているではないか。草卒の書にもかかわらず、微塵の惑いも見せず縦横に運ばれる筆はその場その場で堂々と自在の造形を生み出している。凡庸の力量でできることではないと直観した。以来、原の書を掲載した出版物について努めて目を通した。また、原敬記念館の所蔵品や展示の資料（他機関からの借用資料等）についても種々拝見する機会を得た。

その結果、原敬の書は、「書は人なり」という人間性の投影を明らかに示すばかりでなく、芸術性という点でもひとつの水準に到達した書といえるのではないかという思いを強めた。原の書は、多くの人に大きな感動を与えてくれるばかりでなく、さらに書の実作に携わる者にも貴重な示唆を与えてくれるものと思う。

本稿では、原の書の中でも、書いた人物の書の実力を最もよく示すと言われる「書翰」に絞って、その書的価値について考察してみたい。

二、書の価値とは何か

「書」を語るときよく引き合いに出される「書は人なり」という言葉がある。「書」には、必ずその人物の人柄や性格、心情などまで表れるから、書かれた筆跡の中に投影された書き手の人間性を見ようというのである。

しかし、果たして本当に「書は人」なのか、つまり、「書イコール人」「人イコール書」、書の価値はその人間の価値と同等なのか、人間として優れていればその書もまた優れているのか。しかもまた、書からその人間を全て読み取ることが可能なのか。書という

ものを議論するときに、この「人」と「書」の関係を吟味しておかなければならない。

この問題に対しては、故西川寧氏の明快な文章がある。氏は、書としての価値判断の基準を、人間性の表出とその造形性においている。

一応の水準にいった書は、いつも唐初の典型において発見された法則性に背くものではないのである。間架結構・分間布白という考えは書が客観性を持つ根本の建築的法則で、(中略)その一つの極端は欧陽詢のあのぬけ目のない構成となるが、(中略)良寛の書のよさは書法を超絶したところにあると多くの人は考えているようだが、逼ってまずいところでは筆を離し、離していよいよ点画相互の牽引力が増し、美しい緊張が生れるところではほとんどその限界というところまで引き離す。そこで墨線の部分も張ってくれば空間もいやが上にぴんと高鳴ってくる。こうした純粋に造型に即した必要妥当な位置をとるからその書が美しくなり、良寛独特の甘美な詩情が書ににじみ出すのである。造形的な根拠がなくてあの詩情が出るわけはない。(中略)実は彼こそ書法の一方の端を実に極限にまで生かした人であった。(「書のはなし」/『天地人』第五号・一九五三年初出、『西川寧著作集』第五巻・一九九二年・四七—五二頁所収)

すなわち、線質とともに造形的根拠がしっかりしていなければ詩情が十分に表現されない、造形的な根拠とは、間架結構(注2)・分間布白(注3)の法則で、欧陽詢の書も良寛の書もその表現の両極の姿であるというのである。そして、『書と人』(注4)において、四つのグループに分けて論じている。以下に要約してみると、

第一グループは、良寛・寂厳・池大雅・本阿弥光悦等。古典を習っているが、それを出発点にして、主観を前面に出している。いかにも書は人なりということを見せつけられるもの。造形芸術として第一級。

第二グループは三筆三蹟等本格の書。主観的なものが格調の中に沈んでいるので、見そこないやすい。ここでもやはり書は人なりに違いない。造形芸術として第一級。

第三グループは、白隠・仙厓・慈雲。

第四グループは、西郷隆盛・東郷元帥。

第三、第四は、作者の宗教生活における境界に圧倒されるとか、偉い人に対する尊敬、有名人への興味などにひかれたもの。白隠・仙厓などの境界というものは、今の人には忘れられている、しかもその境界はかえって書として一番大事なものと紙一重というところにあるのかもしれないが、書というものではない。

氏の言う四グループの範疇に、全ての書が整然と当てはまるものではないであろうが、とかく混同して考えがちな、書と人との関係を具体的に例示して、このようにグループ分けして論じたものは氏が初めてである。また、やや長くなるが理解を助ける意味で、さらに氏の論を引用する。

たとえば伊藤博文の書が尊ばれる。なるほど明治期のその仲間では立派なところがあろうが、ごく雑なもので、ほんとうの書の神味とはほど遠いといえばたしかにそうである。人が尊ぶのはその造形性をたしかめたからではなくて、むしろかいた人への傾倒をここに移して来た結果であろう。勝海舟

の字には骨があるというが、にぎりしめすぎたこぶしのような、さざえの殻のようなその姿に貧困相があるのではないか。ここでも人への愛情がその書を愛せしめているというかたむきは多分にあるのだろう。西郷隆盛の場合などは一層これがひどい。その書に、書者の脳髄の、目くるめくまでの回転を察することはできるが、その故に、その書が俗であることを否めない。この頃たいへん尊ばれる白隠禅師の書はどうだ。白隠の書をただの書として見てはいけない。そこに彼のさとりを見出さなければだめだと人はいう。私は〝その通り、あれは全く白隠のさとりの表現なのであろう。しかし書というものはそんなあまいものではない〟と答えようする。書のよさはあくまで造形性において考えられねばならないのだ。(中略)りっぱな表現をかちとった書には書者の人間性があらわれている。そこで書は人格の表現だという。しかし書者が人としてえらいからとて、その書必ずしもよくなく、その書がいいためには書としての造形性における必要な条件を持たなければならない。(「書というもの」/『三田評論』第六六二号・一九六七年初出、『西川寧著作集』第五巻・一九九二年・二四九—二五三頁所収)

「書の造形性(問架結構・分間布白)」と一言でいっても、その優劣を見極めることは鑑賞者の好悪や眼力にかかる、難しい問題である。しかし、書の専門家と思われる人々の論にも、人物評に安易に依存してその書の優劣まで論じてしまっている傾向がありはしないか。その意味では西川氏の右の論は書としての評価に明らかな視点を与えてくれると思う。

三、原敬の書の種類

今日伝えられている原敬の書跡は多種多様であり、各地に散在していることや未整理の資料等もあろうから、その全貌に触れえない筆者の現状では厳密な分類は困難であるが、大まかな分類を試みるならば、

1、「原敬日記」全八十三冊(毛筆)
2、「紀行文」等(毛筆)
3、「句帖」、「短歌」帖面等(毛筆・硬筆)
4、書翰(毛筆)
5、書作品(条幅・扁額・短冊・色紙・扇面等鑑賞用に書かれたもの)(毛筆)
6、各種の書類・メモ等(毛筆・硬筆)

となろうか。

この中で特筆すべきことは、毛筆の書蹟の多いことである。これは原の生きた時代性と成育の環境によるところが大きいだろう。原の育った時代(安政三年・一八五六年生まれ。明治維新の時は十二歳)はまだ毛筆の全盛時代であった。原も幼少から毛筆の手ほどきをうけていた(注5)。また、原が活躍した明治から大正にかけては、書写の用具がそれまでの毛筆一辺倒から、硬筆のペンや万年筆、鉛筆が急速に普及する時期であった。しかし、広く一般にも教養のひとつとして「毛筆で書くこと」が尊重された。事実、原や交流のあった人々の書翰はほとんどが毛筆で書かれたものである。原の書蹟に毛筆のものが多いのは、こうした時代背景と無縁ではない。

四、原敬の書翰の書の特徴

上記の多くの書蹟の中で、筆者は特に書翰の書を取り上げてみたい。書翰の書は、「卒意の書」すなわち「草卒の中に書かれた書」の例として挙げられ、書の世界では、書翰を見ればその人の書の実力が判るとも言われる。今井淩雪氏は、

「卒意」と「用意」というのは書を書くときの状態のことである。繰り返すが、準備したくてもできない状態で書かれた書が、「卒意の書」であり、工夫を積み、計画を立てて書く書が「用意の書」である。卒意の書は、ただそれだけでは良い書には成り難い。平素の修練や鑑賞、高い美意識が草卒の間に発揮されることによってすぐれた書となる。また、用意の書も、その時だけの工夫や計画だけでは不十分で、平生からの修練や鑑賞を必要とする。そうしたことが充分実行されている場合は、それが自信となって、よく揮毫時の精神的圧力を排除して自由な表現が成し得られるのではないか。（中略）それが名跡となるか否かは、筆者の平素からの修練の深さ、書的教養の高さに因る。（「手紙の書」／『手紙の書』・芸術新聞社・一九八五年・一一六―一二〇頁）（傍線引用者）

と述べている。いずれにしても、優れた書を生むためには、平生の技術の修練と美意識の高揚が必要だが、「卒意の書」とて「平素の修練や鑑賞、高い美意識」があってこそ優れた書になるというのである。文字数が一字とか二字とかの書翰はまずない。ある程度の字数、行数になるし、内容がいつも同じとは限らない。とすれば、例え練習をしたとしても練習した文字ばかり書くわけにはいかない。様々な文字を様々な連ね方で書くことになる。臨機応変の実力がなければ草卒のうちに書として優れた書翰を書くことはできないことになる。そういう意味では冒頭で述べた「書翰を見ればその人の書の実力が判る」という言葉も肯首できよう。

幸い、原敬は生前多くの書翰を残した。原敬の書翰の数は著者が掌握したところでは、原敬記念館所蔵の原の書翰及びその草稿（注6）は確実なものが二十五点。それに真蹟か複製か不明のものが十点加わる（注7）。『原敬関係文書・第三巻（書翰編）』（注8）には合計三十点の書翰（含・草稿）の釈文が掲載され、先の記念館の二十五点はこの中に含まれている。『原敬全集』（注9）には七十九点の書翰の釈文と書翰写真三点が、『原敬全傳』（注10）には八点の書翰写真が、乾元社刊『原敬日記』（注11）には一点の書翰草稿写真が掲載されている。また、『写真集・原敬・没後50年その生涯』（注12）には二点の書翰写真が、『原敬日記を繙く』（注13）（9号）に二点、同（12号）に一点の書翰写真が掲載されている。また、巷間にかなり散在していると思われ、正確な数は掌握しきれないであろう。現に著者も田口前原敬記念館長、研究員の赤坂氏から上記以外の真蹟を見せていただいた。

上記の資料では決して原の書翰の全貌を網羅し得ないとは思われるが、今回具体的考察の対象として末尾に付した

（A）原恭宛（明治四十二年十月十一日付）

（B）小野慶蔵宛（大正九年十月二十八日付）

の二点の写真で、原の書の実力は十分に理解できるのではないかと思う。当然年代によって書風には違いが見られるが、この二点の書翰は原の五十三歳と六十四歳のもので晩年の十年余りの中に書かれたもので原の書風の既に完成された時期のもので、いずれも原の書翰の書の特徴がよく表れていると考えられるからである。（A）の書翰の宛先原恭は郷里盛岡に住む兄。書翰の内容は、原が

帰省した際のお礼を述べたものである。(B) の相手小野慶蔵は、明治三十五年に原が衆議院議員に立候補し、当選した時以来の選挙参謀で、以後親密な交流が続けられた人物である。

さて、二点に共通する原の書翰の書の顕著な特徴を挙げてみると、いろいろな形容の仕方があろうが、

1、生命感が横溢している。
2、躍動感・動勢がある。
3、大胆である。
4、雄大でスケールが大きい。
5、行末が左に傾いている。
6、判読しずらい。

等であろうか。以下、これらについて、詳細に考察してみたい。

書にとって最も大切なものは生命感で、これがなかったら書としての価値はない。何度も書き直したりしていると、この生命感が薄れてしまうものだが、原の書翰には生命感に溢れたものが多い。生命感は、南齊の謝赫が画六法の第一に挙げた「気韻生動」、すなわち生命のリズムが生き生きと躍動することで、これは「気脈(注14)の貫通」とも関係する。間然としたところがなく、気脈が途切れていない。連綿しない単体の文字も、連綿を切って新たに書き出される部分も、前の部分を絶妙に受けている。そしてそれが、全体につながり、有機的調和を生んでいる。

(A) の方は、一気呵成に書かれた感があり、奔放で筆勢(注15)が激しい。兄という心安さもあってのこととも考えられるが、草卒の中に書かれた草稿なしの書翰であろうか、極端な滲みや点画の結体に崩れかかった部分(四行目「滞」字など)があり、それが判読の困難さをもたらしている。鑑賞様式の書作品にはないことだが、書翰の書には判読に苦慮する文字がある。

運筆の遅速抑揚の変化があるが、(A)は、おそらく書く速度は全体としてかなり速い。筆への含墨は、潤渇の変化となって表れるが、書き出しの部分の含墨は一般にかなり多い。初心者や臆病な者はどうしても墨量が均一になりがちであるが、原の場合はたっぷりと墨量豊かに、筆圧充分に書き出す。しだいに運筆の速度を速め、筆はリズミカルに、時には横長に時には縦に、大きくまた小さく躍動しながら文字を連ねて進む。和紙と筆は、時に強く擦れ、時に軽く触れ合い、時に捻じれ、弾ける。筆と紙の触れあう激しい音をかき立てながら進んでいることだろう。筆鋒(注16)はよく立ち、万毫が筆者と一体となって己の能力をひたすら発揮しているようだ。例えば、本文の終わりから二行目の末字「知」の終筆等は、筆の状態を腕で感じ取りながら、筆の赴くままに任せて運筆しないと出てこない高度な技術である。筆は十二分に活躍し、シャープで、遅滞のない暢達した線である。

(A) の書翰を動とするなら、(B) は静であろうか、全体として丁寧で慎重な筆の運びが感じられ、年齢的なものというより、原の自分の最大の支持者であった小野慶蔵に対する敬愛の気持ちが伺えるような気がする。墨量の配置や行間の取り方にも計算された慎重さが伺える。字形も極端にくずれたものはなく、原の書翰の中にあっては読みやすい方である。重要なものは草稿を作って清書した原であったが、これなどは草稿があったかも知れないと思えてくる。しかし、何度も書き直した時に出る習気がない。全体を貫く筆意(注17)・気脈は一貫している。

二点の書翰に見られる大きな特徴の一つに、連綿の多用、特に多字連綿が挙げられよう。二、三字の連綿に止まらず、時には一行のほとんどの文字が連綿されている。連綿の仕方も、太い実線あり、スピード速く微かに続く線あり、筆が紙から離れ空間を遙かに駆ける線あり、また、その方向も様々な角度である。連綿し

ながら緩急抑揚の変化があり律動感に溢れている。

文字の構えが大きく、字形はおおらかで、横長にがっしりしたものが目を引くが、よく観察すると縦長、横長等多様である。文字の頭部は左に寄って前傾の造形となるのが漢字でも仮名でも一般的であるが、原の場合、頭を右に振った文字が多い。しかし、随所で前傾文字を配し、特に縦に長く引く点画は左上から右下へ大胆に引くものが多く、全体に変化を与え、単調化を救っている。一字のバランスの取り方の巧みさは（B）の九行目「初」字や、十三行目の「妻」字等に「動中に静」を感じさせる造形を見出す。書翰全体を見たとき、さながら書の専門家の横形式の書作品のように調和の取れた配字の仕方になっている。このあたりに原の感覚のよさを知る思いがする。

（B）からは颯爽、潑剌とした中に、その線質には年輪を加えた壮年の人間の落ち着きと味わいも感じられる。六十四歳という年齢は一般的にも老け込む年代ではないし、まして首相として国政の最前線で活躍していた原にとって老境というような心境とは程遠いものであった筈であるが、まさしく壮年の書という気がする。

平安朝の仮名の散らし書き等は、一、二行目の延長線上に収束するのが普通である。原の手紙は下に行くにしたがって、左に左にと流れていく。漢字は一字の筆順が左上から右下へと移行する。したがって、文字と文字を連続させて行くと、しだいに行の下方に行くにしたがって右に流れて行くのが無理のない方法と考えられる。しかし、これほどまでに極端ではないが、行末の左傾化は中国の米芾や王鐸をはじめ多くの書に見られる傾向であって、原に独自の章法ではない。

原の書翰の行末の左傾化の主たる原因は、一つには、文字の頭部が右傾している文字があることである。二つめに、行の構成法である。単体で文字を連ねていくとき、しばしば下の文字の中心が上の文字の中心より左にずれる。そして、連綿を一端切って、新たに書き始める場合、連綿が幅の狭い文字で終わったときは、末尾の文字の真横に並んだ位置にから新たに書き出したり、行末の場合など、そこで終わって次の行へ移行してもいいと思われるのに真横に連綿して書いたりしている。これほど極端ではないが、ややこれと似た構成法は、書の古典にはよく見られる。これを繰り返しているうちに、一群の連綿を取り出してみると決して左傾しないでむしろ右傾しているところもあるのに、下方に行くにしたがってどんどん左に寄っていくことになる。その結果、一行に入る文字の数は通常より多くなり、行の密度が増し、濃密なムードの形成にも繋がっている。

また、行の頭部の間隔や字形は比較的整然と整っているが、行の末部は大小の文字が入り組み複雑な変化を見せている。これは紙幅全体に単調さを避けて変化をもたらす効果も与えている。

五、原敬の書についての評価

原の書蹟について論じたものは意外と少ない。同じ政治家でも副島蒼海（一八二八～一九〇五）や、原より一年早く生まれた犬養木堂（一八五五～一九三二）などはつとにその書名が高く書の雑誌などにも特集されたりしているのと比較すると格段の違いである。論評したものが少ないということは、論じるほどの価値が認められない、と考えられているからなのか。書の全貌が知られていないからなのか。いずれかは即断しかねるが、筆者が今日までに過眼したものは、

字そのものはあまり上手とはいえない。行の並びは下の方

へ行くに従い左へ左へと曲がっていく。また字体も勝手気ままのところが多く、「奉存候」などはこれだけみただけでは判断がつきかねる。（中略）彼は政友会の拡大のためには手段を選ばなかったといわれる。多数を頼んで力で押しまくるやり方に、人々は「西にレーニンあり、東に原敬あり」と評したという。こうした強引さは書の面にも表れているように思われる。（「原敬」／『書と人物』第四巻／政治家・渡辺清・毎日新聞社・一九七八年、写真は伊藤博文宛書翰（年代については記述なし））

形や巧拙にとらわれない筆の運びは、彼の人間性を告げている。（「人物と書、政治家の書」／『日本の書』・戸川猪佐武・講談社・一九七八年、写真は『書と人物』と同一）

（前略）この間にありて、原敬・米内光政の二人がある。逸山の書は流暢の筆にして弩張の態なく、光政は健挙悦ぶべく、二人の書は書家の範疇を出でてまた伝うるにたるものであろう。（『盛岡市史・文教篇』・太田孝太郎・盛岡市・一九六〇年）

の三編である。三者の資料と批評についてであるが、『書と人物』と『日本の書』に掲載の書翰は、やや線が柔らかく甘さがあって、あまりいいものとは思われない。原の手紙の中にあっては原らしい書と言えないのではないかと思う。

「逸山」は原の号である。流暢という言葉が当てはまるのは、書翰の書の方で、故太田氏（注18）が評したのは書翰についてであろう。どの書翰をとって見てもダイナミックではあるが、氏の指摘したとおり無理な力の入りすぎたものではない。温和な人柄の氏ではあったが、書に対する批評は厳しく、「寸鉄人を殺す」如きであったと知る人は言う。『盛岡市史』でもこの前後多くの書人を酷評している。短いながらも原に対する評価は別格といえよう。

書というものは、言うまでもないことだが、いつ書いても常に同じではない。書かれた条件（例えば、年齢、身体的・精神的状況、揮毫時における様々な外的条件、筆・紙・墨を中心とした用具用材等）によって大きく左右される。一を見て十を判断することはできない。もっとも、一点でも優れた作があれば、その人物の書に対して一定の高い評価が与えることはできるが、その評価は、対象となる材料を十分吟味した上でなされなければならない。

六、おわりに

原の書翰は、資料を吟味して詳細に検討してみると、四項で詳述したように、

筆脈の一貫、連綿の多用、字形・行の処理、筆勢の充実、運筆の変化、用筆の巧みさ、線質の充実

等、書の観点から見て優れたものである。そして修練を経たものである。故西川氏の述べたグループ分けの少なくとも第四のグループに止まっている存在ではないと思う。

原の学書については、伝えられるところ（注5・注19）があるが、他には現在までのところ資料がない。例えば、古典を学んだのか、学んだとしたら、具体的に何をどのような方法で学んだのか、など不明である。また、書論のようなものも明らかでない。その点において、書に対する原の情熱の注ぎ具合が不明で、書としての価値に裏付けが不足しているとも言えよう。

したがって、今後、原敬の書についての評価は、直接には他の書蹟や、日頃の学書、書の形成と変遷の過程、書についての理念

や思索等、また間接的には彼の学問や芸術等の問題についての研究が深まることによって、一層確かなものとなるだろう。

本稿の執筆にあたって、原敬記念館と小野一男氏には貴重な書翰の写真をお借りした。また、田口生前記念館長、西井信弘現記念館長、赤坂愛厚研究員には貴重なご助言を頂戴した。この場を借りて感謝の意を表したい。

(注1) 四月廿四日の日付のある富樫萬次郎宛書翰。(年不明)。
(注2) 点画の間を整え、字形を美しく組み立てること。一字の構成法のこと。
(注3) 文字の点画の間隔や、点画の間に生じる余白を適当に配置し均衡を得ること。
(注4) 一九六二年・毎日新聞社刊。
(注5) 幼時の学書について、『原敬日記』(一九六五年・福村出版)の第一巻二七九頁に太田代直蔵に、また、第二巻十八頁、第四巻二二六頁、三一二頁に寺田直助に習字を習ったことが記述されている。
(注6) 原は重要な書翰は草稿を書き、後に清書したようで、実際に出状した書翰とは異同があると思われるが、例えば、中国の王羲之の「蘭亭序」や、顔真卿の「祭姪文稿」等劇蹟と言われる書の名品が草稿であり、書としての考察の対象とした。
(注7) 『原敬資料所蔵目録』・一九九二年・原敬記念館に刊による。
(注8) 日本放送出版協会。一九八四年・五八三—六一五頁。
(注9) 原敬全集刊行會。一九二九年・一一四三—一二一二頁。
(注10) 日本評論社出版部。一九二二年・巻頭。
(注11) 一九五〇年。
(注12) 原敬遺徳顕彰会。一九七〇年・二二〇—二二二頁。
(注13) 一九九〇年以降刊行の企画展示資料。一九九四年五月現在通巻一五号。
(注14) 気持ちの脈絡、気持ちのつながり、流れ。
(注15) 運筆の勢い。
(注16) 筆の穂先。
(注17) 運筆や用筆の際の筆者の心情。
(注18) 明治十四年(一八八一)〜昭和四二(一九六七)。盛岡の人。号・夢庵。実業界で活躍の傍ら、中国古印・古銅印譜の蒐集に努め、多くの論考がある。中国古印学の草分け的存在。中国金石学・郷土史研究・書にも造詣が深かった。
(注19) 『ふだん着の原敬』(原奎一郎・毎日新聞社・一九七一年)二一八〜二二五頁に池永石に書を学んだことが書いてある。

参考:書翰釈文

(A) 原恭宛 (明治四十二年十月十一日付・原敬記念館蔵)

拝啓今朝五時四十五分/豫定通上野に着/直ニ歸宅致仕候間御安/意奉願上候滞在中ハ/色々御深慮奉拝謝候/母上ヲ始メ皆々様え宜/敷御傳聲奉願上候淺よりも/宜敷申出候/留守居并新宅問之事ハ/萬事可然御深慮奉願上候/取急キ安着御報知/まて申述候 匆々頓首/十月十一日/敬/御尊兄様

(封筒・表) 盛岡市仁王小路五八 原恭様 親展

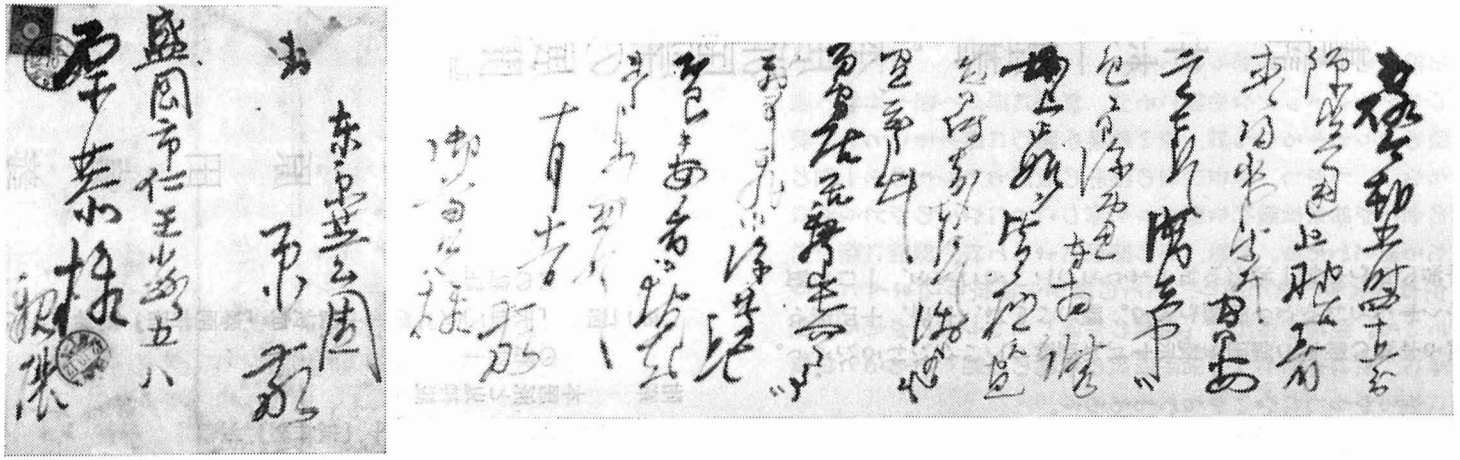
(封筒・裏) 東京芝公園 原敬

(B) 小野慶蔵宛 (大正九年十月二十八日付・小野一男氏蔵)

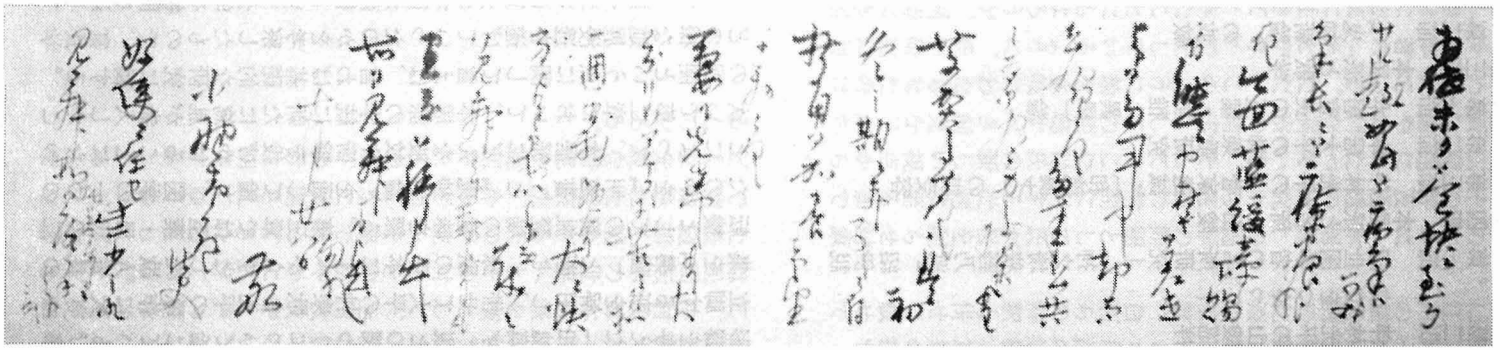
拝啓未タ御全快ニ至ラ/サル趣如此御病氣ハ可然/氣長ニ御療養可然/存候今回藍綬章下賜/ニ付態々中村氏御差遣/被下御多用中却而/恐縮ニ存候多年公共/之為御盡力之結果ニ有之/慶賀之至ニ存候近々初/冬之期ニ相成候事ニ付/折角御加養希望/千萬と存候/妻も先達中より大/分リウマチスに苦ミ候所/一週間前

頃より大ニ快／方ニ有之御安心被下度度々／御見舞被下妻より
も／宜敷御禮申出候／右御見舞旁申述候　匆々頓首／十月廿八
日／敬／小野老臺　侍史／好便ニ任せ些少之御／見舞品託送致候
間御落手被下度候

（岩手大学講師・五月二日受理）



(A)原恭宛(明治42年10月11日付)



(B)小野清蔵宛(大正9年10月28日付)